

Goodbye, Mr. Chips (1933) におけるミドルブラウと教育

Middlebrow and Education in *Goodbye, Mr. Chips* (1933)

井上 美雪
Miyuki INOUE

1. はじめに

ジェイムズ・ヒルトン (James Hilton) 作の『チップス先生さようなら』(*Good-bye, Mr. Chips*) は、出版当時は今からでは想像もつかないほど世間の称賛を受けた作品である。本作品の初出は、1933年に『ブリティッシュ・ウィークリー』(*The British Weekly*) のクリスマス号に掲載されたものである。雑誌のクリスマス号ではその季節にふさわしい心温まる話が掲載されるのが通常であるが、本作品も例にもれず、古き良き時代の人情ものを描いて人々の共感を誘った。本作品の「素朴で本質的な人間らしさ」がアメリカの『アトランティック・マンスリー』(*The Atlantic Monthly*) の編集長エレリー・セジウィックを「楽しませた」(Cutts 11) ため、彼はすでに他所で掲載されたものは再掲載しないというこの雑誌の不文律を破り、翌一九三四年に本作品を掲載した。この号の爆発的な売れ行きのため、本作品はアメリカで単行本化され、その四か月後にイギリスで単行本化された。本作品は、『イヴニング・スタンダード』で文芸批評を担当していたハワード・スプリング (Howard Spring) により傑作と認められた上、「読者からあたたかな賞賛をうけた」(Cutts 11)。さらに1936年には本作品の映画化版權を1936年にアメリカの映画製作会社 MGM が取得し、イギリスで製作された映画版は1939年5月にアメリカで、翌6月にイギリスで公開されるやヒットし、特にアメリカではノミネートされたアカデミー賞7部門すべてで『風と共に去りぬ』を抑えて受賞したのである。

本作品への称賛の多くはチップスという老教師に対する読者の敬慕の念から発せられたものであろう。ヒルトンは、1935年に書いた Preface に次のように記している。「私ほど過去1年で読者からの手紙を楽しんだ作家はいないだろう。彼らからの手紙には、世界の様々な地域でチップス先生のモデルを発見したという報告が載っているのが特徴だ。読者からの手紙が真実のすべてを物語っているものだと信じているし、また、偉大な職業に対して私が示した敬意が各地にいる多くの教師にふさわしいとも信じている」(Hilton 8)。優れた教師としてのチップスは、のちの時代の文学作品でも言及さ

れている。例えば、テレンス・ラティガン (Terence Rattigan) 作の『ブラウニング版』 (*Browning Version*) (1948年) では、主人公の教師はチップスと同じく古典語を教えているうえ、結婚の経緯も似ており、本作品がチップスを下敷きにしていることは指摘されている (中村 71)。この作品中にチップスへの言及があり、生徒から愛されたチップスと対比することで、生徒から馬鹿にされ教職に情熱を持ってない主人公の悲哀がより焦点化されている。また、McCulloch はチップスは「ヴェテラン教師の親しみが持てるステレオタイプ」(409) であると評価している。

一方で、本作品に関する近年の批評は、小説よりもむしろアメリカで製作された映画版に集中しており、その際に注目されるのは、作品で描かれたイギリス賛美とそれが喚起する参戦プロパガンダである。映画の公開年月は、イギリスがドイツに宣戦布告する3~4か月前のことであった。そうした時期にMGMはプレスリリースにおいて、イングランドそのものが神の加護のもとで格調高く描かれていると宣伝し、イギリス情報省は「映画プロパガンダ・プログラム」の観点からすると、本作品はイギリス人が持つ独立心、不屈の精神、弱者への同情などを示すことでイギリス人が何に対して戦っているのかをよく示していると述べている (Glynn 38-39)。戦争を目前に控えた本映画は、第1次世界大戦で命を落とした卒業生について触れたり (23, 49, 66)、ドイツ軍の空襲中にも授業を続けたチップス (89-91) を描くことで、犠牲を払ってでも国を守るべきだという矜持をイギリス人に示しつつ、アメリカ人に対しては同盟国イギリスを守るために参戦を促すプロパガンダになったのである。

本論は、映画版ではなく小説を分析対象とし、ミドルブラウの観点から作品における階級に注目したい。その過程で適宜、映画作品が持つプロパガンダや政治性を詳細に分析した批評を参考にする。特に、映画版が主軸とする「我々は皆その〔イギリスという共同体の〕中にとともにいるのだ」(Glynn 37) という批評は、本論が結論とする階級横断性あるいは無階級性を目指しているかに思われる作品の結末についての解釈の参考となるだろう。

小説や映画をミドルブラウの観点から分析するミドルブラウ研究は1990年代から2000年代にかけて興ってきたが、特に2008年にはミドルブラウ・ネットワーク (www.middlebrow-network.com) が活動を開始してイギリス内外のミドルブラウ研究者の研究をつなぎ盛り上げてきた。まだミドルブラウの観点で分析された作品は、他の批評の手法と比較すると少なく、本小説をミドルブラウの観点から分析した先行研究はまだ存在しない。近年多くなされている映画版の研究において、Glynn は、一言「懐古調の“ミドル・ブラウ”な作品」(12) と批評の冒頭で紹介している。しかしおそらく Glynn は、近年のミドルブラウ研究に基づいてこの語を使用しているのではないように思われる。彼は当時の批評として、『スペクテイター』誌に掲載されたグレアム・グリーン (Graham Green) の「感傷に酔いしれたイングランドのパブリックスクール」(39) (傍点引用者) という言葉や、『ニュー・ステイツマン』誌に掲載されたピーター・ゴルウェイ (Peter Galway) の「彼〔チップス〕のような人への人気 (popularity)」(39) という言葉を紹介しており、その大衆性を意識している。おそらく一般受けするという意味でミドルブラウという語を用いたのではないかと推測できる。一方で、松本は近

年のミドルブラウ研究の観点から分析し、ローブラウのものともみなされていた映画をミドルブラウのものへと格上げしようとしていた1930年代のイギリス映画界の試みを分析する中で、チップスの映画版に言及している。直接チップスのミドルブラウ性について論じてはいないが、同じ監督の他作品である『サウス・ライディング』（1938）の分析は示唆に富む（松本 277-78）。

本論は、近年のミドルブラウ研究が示唆する階級横断性あるいはクラスレスネスといった観点から本作品における教育と階級の関りを分析する。結論として、チップスは、全編を通してイギリスの歴史を体現し、階級の永続性を象徴する人物であるかのように描かれているものの、実はミドルブラウ性を帯びた人物であり、そのミドルブラウ性ゆえに階級の混交あるいは消滅を働きかける人物でもあることを証明したい。また、それが教育を通じてなされていることにも着目したい。映画版で描かれた、戦争を目前にしての共同体形成という抽象的な理想は、現実には教育改革を通じて行われうることが示唆されているのである。以下で、本作品に描かれる階級、ミドルブラウ性、教育と奨学金について分析していく。

2. イギリスの求心力としてのチップス

本作品は、ブルックフィールド校に長年にわたって勤めたチップスの物語である。彼は、学校の歴史そのものであり、その学校がイギリスを象徴するがごとく描かれているため、イギリスらしさ一なかでもイギリスの良心一を体現しているともいえる。

まずは、イギリスを象徴しているブルックフィールド校について事実を抑えておきたい。この学校は、「エリザベス女王の治世にグラマー・スクールとして設立され、もし運が良ければハロー校と同じくらいに有名になっていたかもしれないが、それほど運に恵まれなかったために浮き沈みを経験し、一時期は存在を忘れられたほどであった」（18）。つまり、一流の、そしてそれゆえに排他的なパブリック・スクールではないことから、受け入れていた生徒たちは、当時の中等教育を受ける階級の中では、一般的な家庭であったことが推測される。小説の記述によれば、この学校は、「二流校の中では良い学校」として「幾つかの名家が支援をし、各時代で歴史を作ってきたような判事や議員や植民地官僚や貴族や主教も輩出したが、大部分の卒業生は商人や製造業者や専門職についたし、少数ながら地方の大地主や主任司祭になったものもいた」（19）。この記述が、チップスが着任した1870年から死ぬまでの1833年のいつの時代を指したものは不明であるが、ごく一般的な中等教育学校であることがわかる。

チップスは、この学校の歴史を象徴している。第1章において、かつて校長だった今は亡き人物を思い出して、「自分はおそらくウェザビー爺さん〔校長〕との鮮やかな思い出をもった世界でただ一人の人間だろう」（13）と思う。また同じく第1章で、現役時代を振り返って、コリー家を3代にわたって教えたことを回想する。チップスが着任して初めて罰した生徒が長じてロンドンの参事会員

かつ准男爵のサー・リチャードと呼ばれるようになると彼は母校に息子を送り込み、その息子がさらに息子を母校に入れたために、チップスは孫を次のようにならなかつたのだ。[「コリー、君は、うん、遺伝によって伝統を受け継ぐ素晴らしい例だね。…君のおじいさんはお馬鹿さんだったし、君のお父さんもそうだった。…しかし可愛いコリーよ、…君が一番のお馬鹿さんだね」(16)。こうした代々の入学生へのジョークは、彼の十八番であった。彼は学校の歴史を覚えている生き字引なのである。

チップスが記憶する学校の歴史は、イギリスの近世史として描き出されることに着目したい。かつての教員や生徒を思い出すうちに、何故か「彼は突然、エリザベス朝以来の何百万人もの男の子たちの姿を見た—何代もの教員たちの時代—消えかきそうに記録にすら残っていないブルックフィールド校の数時代」(49)という幻を見るのである。そしてエリザベス朝に開校したこの学校の歴史を、イギリス史に残る大事件と重ねて考え始める。「クロムウェルが近くのネイズビーで反乱を起こしたとき、ブルックフィールド校では何が起こったのだろう」(49)という素朴な疑問に続き、ジャコバイトの反乱(1745年)では生徒たちはどう感じたのか、ワーテルローの戦い(1815年)の勝利に際しては学校はその日を祝日として祝ったのか、1870年の普仏戦争ではどうだったのかと考え続ける(49)。チップスの記憶の中で学校の歴史はイギリスの歴史そのものへと変換される。そして、1870年のイギリスとブルックフィールド校を重ね合わせて考えたときに、チップスにはイギリスの歴史性が付与される。なぜならば、1870年こそ彼がブルックフィールド校に着任した年だからである。エリザベス朝から始まる学校／イギリスの結合した歴史の最後に位置するのがチップスなのである。

チップスがイギリスの歴史性を持つとしたとき、この先のイギリスの未来をも決定する存在として描かれていることが重要であろう。彼は、新しく赴任してきた有能で現代的な校長から60歳になるとすぐに職を辞すよう命じられたが、その時に卒業生の准男爵に「理事会は最後の一人に至るまであなたの味方です」(74)と励まされ、「ブルックフィールド校はあなた無しではもはやブルックフィールド校ではなくなる」(74)と告げられる。さらには、「もしあなたがそうしたいと望むのであれば、100歳まででもここに残って頂きたいし、それが我々の望みなのです」(74)と言われる。チップスは、寿命の許す限りブルックフィールドの未来と共にあるべき存在となっている。

チップスと共にあるブルックフィールド、ひいてはイギリスは、チップスの求心力により一つにまとまることが示唆されている。例えば、第1次世界大戦中に学校が標的にされ、結果的に5発の爆弾が敷地内に落ちて9人が亡くなったことがあった。爆弾が落ち始めたとき、不安になった生徒もいたし、多くは授業に集中するどころではなかったにもかかわらず(89)、チップスはもし爆撃で死ぬ運命なのであれば「本当にすべきことに従事していたさなかだったとわかってもらいたくないか」(89)と述べ、生徒を奮い立たせたのである。こうしてチップスは、「あなたは、もし物事がバラバラになって飛んでいきそうなどときには、それらをしっかりと束ねておくことが出来る人だ。そしてひょっとしたら、そうした危機は今も存在しているのかもしれない」(83)という評価を得る。つまり、過去においても、現在においても、そして未来においても、チップスはイギリスを一つにまとめている

のである。

チップスは、あらゆることにおいて中立を貫くことでイギリスを一つにまとめようとしているようであり、その態度は特に階級間の衝突に際して緩衝材となることで際立つ。例えばチップスは、ロイド・ジョージの人民予算については特に何の反応も示さなかった(59-60)。また、ゼネストについてはジョークのネタにした(69-97) だけであった。一方で、ストライキ中の労働者たちをまるで動物園から抜け出した奇妙な動物のように考えている生徒に対しては、「ストライカー」ではなく「ジョーンズ氏」として紹介して会わせ、ジョーンズ氏は駅の信号係として生徒を含む多くの人の命を担っている(63)、生徒たちの生活を支える一部であることを教える。チップスは、所属階級によって政治的に意見が対立するような事柄については中立を保ち、対立する両者の仲介を担うのである。

チップスはいつの時代においても、イギリスを一つにまとめ、知らない者同士、対立する者同士、階級が異なる者同士を結び付けつつ、外部の危機に立ち向かう存在なのである。

3. 本作品における階級

本節では、チップスが体現するイギリスにおいて、階級はどのような形で描かれているかを分析する。まず初めにチップスの階級について確認しておきたい。チップスの生まれについては、短く「1848年に生まれた」(13) との記述があるだけである。その後については、「[1851年の] 万国博覧会によちよち歩きのところ連れていかれ」(13)、1867年にケンブリッジ大学に進学した(40) ことが触れているだけである。チップスの家族や出身階級については記述がないため推測するしかないが、イギリスで公費による公立の初等教育が法的に定められたのが1870年であることを考慮すると、この時期に初等・中等教育を受けて大学まで進学したということは、基本的には学費等の出費は家族が賄っていたのだらうと思われる。もちろんチップスが奨学金を獲得していれば話は違う。しかし、彼は特に優秀だったわけではなく、「例えば、彼の取得した学位は、特に素晴らしいものではなかった」(19)。このことから、彼が自らの優秀さを武器に奨学金を勝ち取ったロウワー・ミドルやワーキング・クラス出身の奨学金少年ではなかったように思われる。彼はおそらくアッパー・ミドルの出身であると推測できる。

ただ、彼の出身階級を断片的な情報を拾い集めて推測するよりも、むしろ彼の家族や家系や出身地が言及されないことの意味を探るほうがより重要なように思われる。彼の生徒たちの家系は2代3代にわたって紹介されており、さらには学校の歴史はエリザベス朝にまでさかのぼって紹介されている。それと比較すると、彼のバックグラウンドに関する情報の少なさは不自然であるのだ。だが、ここでは論を進めるにあたって、彼の出身階級を示すものはその出身大学でしかないということは覚えておくにとどめておき、出身階級が明示されないことの意味については、後述することとしたい。

出身階級とは別に、ブラウの観点から分析すると、彼はミドルブラウ的な趣味趣向を持つ人物であ

る。読者は、教員としての彼がどのような人間だったかを知る前に、彼のミドルブラウ性について知らされる。冒頭から数えて第2段落目で、彼が探偵小説の愛好家であることが述べられているのである(12)。第3章でさらに詳しく述べられているが、そこでの描写によれば、彼の書棚には彼の専門である古典の本が大半を占めていたが、一番下の棚には「安っぽい装丁の探偵小説」が山と積まれており、彼は「時折ヴェルギリウスやクセノフォンを取り出して少しの間読むのだが、すぐにソーンダイク博士やフレンチ警部に戻ってしまう」(25)のである。彼は1913年に初めてシャーロックホームズを読んで以来探偵小説に夢中になり始めたのだった(79)。

チップスは、彼の専門であるラテン語についても、ミドルブラウ的な大衆教養主義的な態度を見せる。彼は、ラテン語は英国紳士が引用に使えば良いだけであると考え、かつて生きていた人々によって使われていた生きた言語であったとはあまり捉えない(25)。ときおりタイムズ紙に自分が知っている引用を見付けると気分が良くなる(25)という俗物性もみせる。チップスは、ラテン語教育は「ちょっとした秘密、価値ある秘密結社的なもの」(26)だと感じ、自分は人とは違うのだという優越感に浸るための小道具でもあると考える。当時の社会においても、パブリック・スクールやグラママー・スクールで、ラテン語のような死語を教えることは無駄であるという批判は盛んであったが、彼はそうした真面目な否定論を飛び越えて、ラテン語を大衆教養主義的なファッションとして扱うことで、ミドルブラウ性を体現している。

実際のところ、彼が授業を通して生徒たちに彼らの人間形成に寄与したことはない。彼の授業内容としては、ダジャレ(38-39、85)か冗談(38)か、前述のような親子代々の入学生に対する親族ネタしかない。当時パブリック・スクールやグラママー・スクールが特権的であり高尚なものと思われていたのは、死語であるからこそ教養の粋だと思われていたラテン語教育を実施していたからであった。しかし、チップスが行う授業内容はダジャレであり、彼のラテン語に対する態度は大衆教養主義的である。中等教育学校を舞台にした話でありながら、思春期の少年たちに施される教育内容は、教養主義に基づいたものではないのである。

イギリスを体現するとされるチップスが「深みのある古典語の教師ではない」(25)ことは、階級と学校教育の点で重要だ。というのも、すべての人が中等教育を受けていたわけではない19世紀後半から20世紀前半にかけて、チップスが古典語がもたらすとされる真の教養を教えていたのではなく、大衆教養主義的なミドルブラウ性を発揮してただけであるならば、特権階級を再生産すると思われる中等教育学校は、その教育内容において階級との関連性を失う。むしろ、教師が大衆教養主義を掲げるのであれば、教育内容の点においてという限定はつくものの、当時特権的であった中等教育学校に通った者と、通わずにいた者の間で違いはなくなる。階級間の差異がなくなるのである。あるいは、両者は大衆教養主義に触れたという点で共通点を持つと言い換えても良いかもしれない。

近年のミドルブラウ研究では、ミドルブラウ文化は階級横断性／クラスレスネスや大衆教養主義を持つということが明らかになってきている(井川・武藤 9)。本作品にミドルブラウの視点を入れると、第2次大戦という危機を前にしてすべての国民を一つに束ねる対ドイツのプロパガンダ性がある

るとされていた本作品が、実は様々な階級があるイギリスの結節点となる人物がミドルブラウ性を持つことで国民を一つにまとめていた話に書き換えられる。国民間の差異を無くすのは、政治の上では例えばロイド・ジョージの人民予算かもしれない。しかし、人民予算の導入は階級間の摩擦を増やした。一方、ミドルブラウ作品は学校教育という人生に関わる重要な制度において内から階級間の垣根を実質的に取り払っているといえる。さらにいえば、チップスのミドルブラウ性は、戦争とは関係なく発揮されるものであった。つまり、イギリス国民は戦争という未曾有の危機がなかったとしても、ミドルブラウ性により一つにまとまっていたかもしれないという可能性も、非現実的ではあるが、見いだせるのである。

4. チップスと奨学金

前節では、チップスのミドルブラウ性が中等教育の有無にかかわらず階級間の差異を無くし、階級間に共通点をもたらす解釈が可能であることを確認した。本節では、チップスがより現実的な方策により階級間の差異を取り払おうとしていること、そして本作品が最後に示すのが、誰でもブルックフィールド校に入学可能となる未来であることを確認していきたい。

チップスは、死去する3年前である1930年に遺言書を作成する。その内容は、ブルックフィールド校が持つ社会救済施設と、下宿屋のおかみに残す以外の遺産を「ブルックフィールド校での教育のために受給資格を定めない奨学金設立のために全額を残す」(97) というものであった。当時のイギリスでは、1902年教育法付則により1907年から補助金を受けているグラマー・スクールは入学定員の25%に対して無償学費や奨学金を出していた。また、法律制定以前にもすでに奨学金を創設している中等教育学校は多く、中等教育に関する勅命委員会 (Royal Commission on Secondary Education) は、1894年の時点でイングランドで奨学金を受けて中等教育を受けているものは2207名に上ることを1895年に報告している (373)。ブルックフィールド校がこうした学校に含まれるかは不明である。だが、奨学金を出していた可能性、あるいは奨学金設立を肯定する可能性がほのめかされてもいる。そのヒントとなるのが、死の直前に出会った少年である。

その少年は、リンフォードという名前のシュロップシャー出身者である (104)。リンフォードは、一族の中で初めてブルックフィールド校にやってきたのだった (104)。ブルックフィールド校には親子代々にわたって通う者がいる中で、一族で初めての入学者ということは、新たなタイプの入学者だといえよう。チップスの奨学金が設立される以前に、すでにこうした生徒が入学してきており、新たな時代の流れを予感させる。また、作品で奨学金という語が出た直後にリンフォードが描かれるということは、奨学金が導入されれば、彼のようにこれまで入学してこなかった層が入学する流れが定着することを示唆しているのである。

ここで、先に結論を出さずにいたチップスの出身階級が明言されていないことをどのように受け止

めるべきか考えたい。ブルックフィールド校を体現する教師のチップスの出身階級が（推測は可能であるものの）明言されていないということは、いかなる階級の出身者であっても中等教育を受けられることを示唆していると言えるだろう。親子代々あるいは一族で入学してくる生徒を1人1人記憶しているチップスは、特権階級の再生産の証人であると同時に、そうした階級の持続性を承認する存在である。その彼が受給資格を定めない奨学金を設立したということは、出身階級や出身家庭は教育を受ける資格とは関係ないと判断したということであり、階級の再生産を否定したということである。

ここで、ブルデューのいう経済資本、社会資本、文化資本の点からもチップスを分析してみると、特権的な中等教育に携わることで得た経済資本は奨学金や社会救済施設へと使用目的を向けられており、文化資本の点ではミドルブラウ志向であり、社会資本の点ではストライカーとも親しくしており、いずれの点からも階級の垣根を取り払おうとしていることが確認できる。

ブルックフィールド校と当時のイギリス社会の動きを織り交ぜながら語ってきたチップスのナレーションに欠けている事項があるとすれば、肝心の中等教育をめぐる改革であろう。イギリスでは、20世紀に入って中等教育の義務化が社会政治的な一大関心事となっていた。というのも、1870年に初等教育が整備された後の課題として中等教育の整備が手つかずで残されていたが、パブリック・スクールおよびグラマー・スクールでの教育はアッパー・ミドル・クラスの特権であると考えて全国民への中等教育開放に抵抗する動きが強かったからであった。そのため、生徒の能力とタイプに応じて、グラマー・スクール、モダン・スクール、テクニカル・ハイ・スクールという3つの種類の中等教育学校に振り分けるという3分岐制が確立されていったのだが、それが提唱されたのが1927年の『ハドー報告』および1933年に設置されたスペンズ委員会が1938年に出した『スペンズ報告』であった。本作品が書き上げられたのが1933年であるため、ちょうど3分岐制が確立されつつあった真ただ中であつたと言えよう。

ここでまたしてもチップスは、自分で奨学金を設立することで、社会の動きとは無関係に教育による階級の垣根を取り払おうとしていたように見える。チップスは、政治等からは離れた立場を取りつつ、自分で出来ることでクラスレスな社会を構築しようとしていたといえる。チップスの持つミドルブラウ性は、階級横断性あるいはクラスレスネスを帯び、それを彼は社会運動や政治運動につなげるのではなく、個人として実現しようとしているのである。

5. 結び

以上見てきたように、チップスはナラティブのレベルでは、ブルックフィールド校およびイギリスの歴史を記憶している点で、歴史そのものとなっている。同時に、解体しかねないイギリスを束ねる求心力も持ち合わせており、ブルックフィールド校／イギリスそのものとして描かれている。しかし、その求心力は、これまでの先行研究が示してきたように戦争という対外的な危機に際して参戦を

促すプロパガンダ性を帯びたものというよりはむしろ、階級の垣根を取り払おうとする彼のミドルブラウ性に因るものが多いことも明らかになった。彼の施す教育内容は、伝統的な教養主義というよりは大衆教養主義的であり、教育という制度内で未だ特権的な地位を確保しているエリートを養成する機関である中等教育学校をミドルブラウ文化に染めるものであった。また、彼が設立を願う奨学金は、制度としてクラスレスネスを志向するものである。以上のように、チップスは教育のうちからも外からもクラスレスネスを打ち立てようとしていた存在なのである。

引用文献

- Cutts, Leonard. "Foreword." Hilton, James. *Goodbye Mr. Chips*. 11th Impression. Sevenoaks: Hodder and Stoughton, 1988. Print.
- Glynn, Stephen. *The British School Film: From Tom Brown to Harry Potter, Representations of Secondary Education in British Cinema*. London: Palgrave Macmillan, 2016. Print.
- Hilton, James. *Goodbye, Mr. Chips and To You, Mr. Chips*. G.K. Hall and Chivers Press: Thorndike and Bath, 1995. Print.
- Hilton, James. Preface. *Goodbye, Mr. Chips and To You, Mr. Chips*. G.K. Hall and Chivers Press: Thorndike and Bath, 1995.
- McCulloch, Gary. "The Moral Universe of Mr Chips: Veteran Teachers in British Literature and Drama." *Teachers and Teaching: Theory and Practice*. 15: 4. 2009. 409-420.
- Royal Commission on Secondary Education. *British Parliamentary Papers: Report of the Commissioners*. Shannon: Irish UP, 1970. Print.
- 井川ちとせ・武藤浩史、「序」、中央大学人文科学研究所編、『英国ミドルブラウ文化研究の挑戦』、中央大学出版部、2018年。
- 中村愛人、「『The Browning Version』にみる教師の転換点」『広島大学教育学部紀要』第40号第2部（1991）、69-75。
- 松本朗、「『一つの世界の市民』としての映画観客—『クロースアップ』誌と映画『サウス・ライディング』にみられるブラウの戦い—」、中央大学人文科学研究所編、『英国ミドルブラウ文化研究の挑戦』、中央大学出版部、2018年。

【Abstract】

Middlebrow and Education in *Goodbye, Mr. Chips* (1933)

Miyuki INOUE

This paper examines education and class in James Hilton's *Goodbye, Mr. Chips* (1933) in terms of middlebrow of Mr. Chips. Recent studies on middlebrow reveal that it entails classlessness. Applying this finding to the reading of the story shows that Mr. Chips, who has long been thought to praise the glory of England and its famous educational system, public schools, has a drive to make a classless society.

Mr. Chips, a Latin master at a grammar school with a long history, is in truth a middlebrow. He loves reading detective novels such as Sherlock Holmes, Dr. Thorndyke, and Inspector French. He does not think learning Latin deepens students' characters. It only helps when understanding quotations. The story tells, "he was not ... a very profound classical scholar." If education and educators at grammar schools have middlebrow inclinations, then the schools would lose their uperiority. At the end of the story, Mr. Chips leaves all he has to establish an open scholarship. It is indicated that the school is beginning to change even without his scholarship, since the last student he meets in his lifetime is the first to go to a public school in his family, which is a rare example at the school. But his open scholarship would boost the tendency. Thus, on the contrary to the common understanding, Mr. Chips is a middlebrow who brings classlessness to an educational institution for the privileged.